

「わたしは道である」

詩篇 第37篇 1節～6節  
ヨハネによる福音書 第14章 1節～17節

説教 岡村 恒牧師

「わたしは道であり、真理であり、命である。」(6節)いよいよ十字架での死を前にして、主イエスは弟子たちに言われたのです。道である主イエスを通りさえすれば、父のみもとに行くことができると言われたのです。

〈過越しの祭り〉の食卓での出来事です。かつて奴隷であったユダヤ人を、神ご自身がエジプトの地から連れ出して下さった時、神は〈わたしがあなたの神である〉と宣言して十戒をお与えになりました(出エジプト記 20章)。ユダヤ人にとってこの祭りは、神が生きて働き、今この私を生かして下さることを確認する大切な祭りでした。しかしこの夜は、いつもと異なっていました。主イエスが弟子たちの足を洗われたこと、イスカリオテのユダが何事かをすするために出て行ったこと、主がペテロの裏切りを予告されたことは異常な出来事でした。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」(1節)と、主イエスは別れの説教をなさいました。これは弟子たちへの〈牧会の説教〉でした。牧会とは、羊飼いが羊を養う様子を言う言葉です。主イエスは最後の夜に、弟子たち一人一人を深く愛して語り、祈って下さいました。この夜の言葉は、今、ここにいる私たちに〈愛する子〉、〈友〉と語りかけて下さる牧会説教です。私たちは誰もが、神の前に立つことができない者です。主イエスと一緒に生活をし、お言葉を聞き、奇跡を目の当たりにしてきた弟子たちでさえ、心を騒がせてしまいました。ましてや私たちは、神との深い関わりを持たず、神に愛される資格のない者ですから、いつも心を騒がせるのです。

私は14章の1節～3節の御言葉を、葬儀のたびに一番最初の〈序詞〉の部分で朗読します。私たちの教会で行う葬儀が、いったいどういうものかを最も明瞭に言い表す言葉だからです。主イエスは、いよいよ地上の歩みを終えようとしておられるこの夜、ご自身が地上に降ってこられた目的、これから起こる十字架の死という出来事の意味をはっきりとお語りになったのです。トマスが、「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。」(5節)と尋ねたように、弟子たちには主イエスのお言葉を理解することも、神の救いのご計画を受け止めることもできませんでした。ただ主イエスだけが、目の前にいる弟子たちが永遠の命を得て、神のすまいに迎え入れられるように願い、祈り、語

られたのです。そして主イエスは、その身を投げ出し、命を注ぎ出して下さいました。主イエスを救い主として信じ、罪の赦しの洗礼を受けられた者は誰でも、終わりの日、神の前に立つ時にはっきりとこう言うことができるようになるためです。〈私は洗礼を受けている。私の名前は、命の書に記されている〉と。

主イエスが十字架に架けられた時、弟子たちは一人残らず逃げ出しました。主イエスは弟子たちの弱さをご存知でした。私たち人間の決心や情熱は、私たちを支えることができません。そこで主イエスは、「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。」(16節)と約束して下さいました。〈共にいる〉という言葉は、ぶどうの枝が木にくつながら(15章4節、他)と同じ言葉です。助け主なる聖霊が私たちに注がれ、私たちを主イエスに、何があっても離れることのないように固く結びつけて下さるのです。

主イエスは、私たちに代わって父なる神の〈さばき〉を引き受け、私たちを死から命に移して下さいました。しかも主イエスは、助け主なる聖霊を送って、今も私たちと共にいて下さいます。三位一体の神を信じる私たちは、聖霊なる神が共にいて下さるので、父なる神とも、子なる神主イエスとも、いつも、いつまでも結びつけられて生かされていることを知っています。

やがて終わりの日、御子イエス・キリストが用意して下さいした〈父のもとのすまい〉に迎え入れられる時が来ます。その時、私たちが何者かを、聖霊なる神が証明して下さいます。洗礼を受けられた者は、確かにキリストのものであり、神の子であると保証されます。

「わたしは道であり、真理であり、命である。」という言葉は、主イエスについての説明の言葉ではありません。主イエスを信じて、主イエスを通して神の真実に出会い、永遠の命を頂いて生きようと私たちを招いて下さる約束の言葉です。私たちの無知や不信仰にもかかわらず、いやむしろそのために、主イエス・キリストはとりなしの祈りを捧げ、十字架に架かって死に、復活して私たち一人一人をご自身に固く結びつけて下さいました。主イエスを信じて、命の道を歩みましょう。

(記 岡村 恒)